

「立川ローム層の層序区分」

その現状と課題——下総台地の場合

橋本勝雄

1. はじめに

土木工学、考古学、テフクロノロジーの見地から関東ローム層の調査が行なわれてよりすでに約20年が経過している。

この間、野川・月見野の調査によって旧石器時代の研究は質的な向上をとげるとともにローム層の研究に拍車がかげられた。

千葉県一特に下総台地—では野川・月見野とはほぼ同時期に三里塚遺跡群の調査が実施された。以来、ローム層の層序区分に対する関心が高まり、その客観性、他地域との対比を模索して鉍物分析が実施されてきた。(堤貞夫 昭和46年)

特に佐倉市星谷津遺跡では鉍物分析の他、始良Tn火山灰(略称AT)の同定がなされ、より精度の高い層序区分が確立された。(杉原重夫他 昭和53年)しかしながら、後述するように不十分な点が多く、様相はいまだ流動的である。

層序区分の確立は考古学的調査研究の礎でありとりわけ石器群の研究には必須事項であることは論をまたない。過去に分層が不十分であったため石器群の編年に矛盾が生じた例があったがこのような状況を打破すべくここで、層序区分に対する一提言を行なうことにしたい。

2. 基本的問題

層序区分とはとかく主観的で個人個人の力量に委ねられるが、特に遺構の覆土などの小範囲で多様な土層にその傾向が強い。

ローム層はこれとは異なり、広い範囲に降灰しており、その時々々の火山の噴火様式や風向などで厚さや含有物に地域差がみられるものの統一的な層序区分が可能である。したがって時間的にも空間的にも明瞭な示標となりうる。

しかしながら、考古学的な層序区分と土壌・地質学的な層序区分とは互いに齟齬がみられる。これはタイム・スケールの違いや、学問的な性格の違いに基づくものと考えられる。例えば松井健氏

は土壌学者の立場から関東ローム層を土壌層位におきかえることを意図しているが、これが直ちにわれわれの目的に合致したものであるかは別問題であろう。(松井健 昭和51年)

しかし、いずれの立場も土層の生成過程を明らかに認識した上で層序区分を実施する必要性は言うまでもない。

さて肉眼的な層序区分を客観化する意味で鉍物分析が実施されている。鉍物分析は、大局的な層相の変化—例えば、立川ローム・武蔵野ロームの区分のレベルで—をとらえる場合にはそれなりに意味を持っているが、さらに微視的な分層を実施する場合には現状ではさほど目だった効果が期待できない。

鉍物分析のサンプリングの場合、一箇所のサンプルの幅にすでに数時期の降下テフラが含まれているし、降下サイクルは多様である。さらにローム層の堆積状態(特に厚さ)による採取位置の違いは鉍物組成に変化をもたらすものと考えられる。(註1)

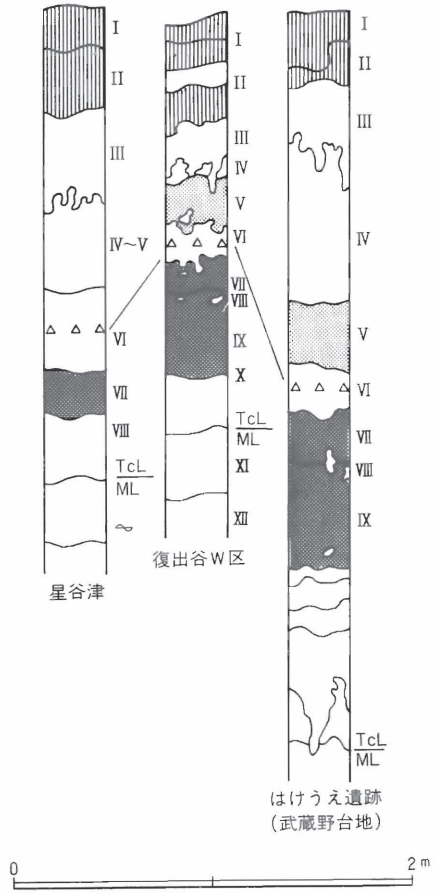
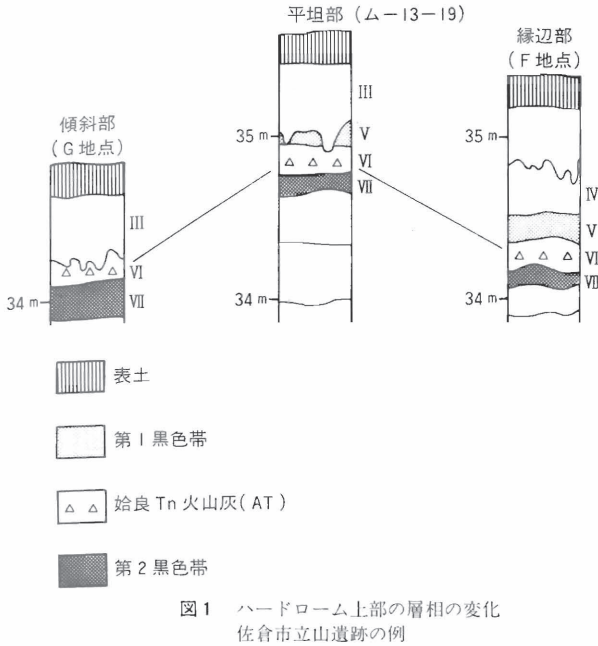
結果として、鉍物分析の活用方法としては各遺跡個々の層序区分が果たして妥当なものかを判定する資料にすぎないのではないだろうか。

鉍物分析によって得られたデータは層序区分を行なう場合の一つの属性にすぎない。したがって、粘土鉍物分析、火山ガラス等の他の分析方法によってこれを補完することがのぞましいし、新たな分析方法の開発が待たれるところである。

3. 基本層序の検討

下総台地の層相は武蔵野台地と基本的にはかわりがない。

現在、妥当と思われる報名例は白井町復山谷遺跡(田村隆 昭和57年)、佐倉市立山遺跡(金丸誠 昭和57年)、君津郡袖ヶ浦町清水川名遺跡(佐久間豊他 昭和58年)などである。特に立山遺跡ではハードローム上面の層相の変化を地形に沿ってた



どれる点が意義深い。(第1図)

以下、ソフトロームより立川ローム下部に至るまでその生成過程を含め叙述していくことにする。

(第2図)

① ソフトローム

軟質で空隙の大きな黄褐色ロームである。いずれの地域でもほぼ一定の厚さ(30~40cm)を保っている。

ソフトロームは土壤生成作用による膨軟化によるものと言われているが、(松井健 昭和51年)その生成因子は複雑である。その中で大きな要因として木の根(小林達雄 昭和50年)、霜による影響(羽島謙三 昭和50年)などが考えられている。

小林達雄氏によればソフトロームの生成時期は活発な火山灰の供給が終了してローム層がしばらく地表に露出し、黒色の腐植土層の発達する直前に限定できると言う。(小林達雄 昭和50年)腐植土が形成される際に、植生やローム層の堆積状況などにより黒色の腐植土層の厚さが異なり、縄文時代の遺物がソフトローム中より出土する場合も考えられる。腐植土の下限は約一万年前と言われているが腐植の蓄積量によって違う場合もあり必ずしも時間的層準を表示しているとは言えない。

ソフトロームは通常Ⅲ層とされているが地形・

火山灰層の堆積状況によってはⅣ層以下をとりこんでいる場合がある。

② Ⅳ層

黄褐色の硬質ローム層である。武蔵野台地では1m内外の厚さがあるが、下総台地では台地平坦部では大部分がソフトローム化している。

③ Ⅴ層

第1黒色帯である。色調は淡暗褐色を呈し下位の第2黒色帯に比べ非常に色が淡く識別が困難である。下総台地のハードルーム上面はほぼこの層であると言っても過言ではない。

④ Ⅵ層

始良Tn火山灰(AT)を含む層である。黄白色を呈し硬質でATは通常は約15cmの幅に拡散している。ただし、柏市聖人塚、同中山新田Ⅱ-2、

佐倉市星谷津，八千代市北海道などでは低地でブロック状に水平堆積している様子が観察されている。

なお，VI層の下位にあってVI層からVII層への漸移層をVI'層として筆者は暫定的に区分している。VI'層は武蔵野台地でも観察され，VII層上部に入れている。

⑤ VII層～IX層（星谷津 VII層）

粘性を帯びた暗褐色ロームである。第2黒色帯と言われており，間層帯（VIII層）や色調の濃淡により上下2枚の自然層（VII層，IX層）に区分し得る。VIII層は全く存在しないかあるいはブロック状層を形成する場合とさまざまである。これはおそらくVII層の腐食の蓄積量の差異によるものであろう。

黒色帯の形成には一般に植生としては草原，気候としてはモンスーン気候などにより腐植が蓄積され，立川ローム層の中では相対的に大規模な降灰によって埋没したものと考えられている。（町田洋 昭和52年）しかしながら町田洋らによれば黒色帯の形成は堆積速度が緩慢になったことやふつうと粒度が細くなったことなどのテラフの供給条件や風化や土壌化を促進させる気候条件との互いに独立した要因に支配され，これらの要因がどれだけ関与しているか判定するのは困難であると言う。（町田洋他 昭和46年）

いずれにしろ黒色帯上面にはかなり長期間の時間的な断絶が存在する。特に第2黒色帯は広範囲にしかも明瞭にみられることから相対的長期にわたることが推定できる。

⑥ X層（星谷津VIII層）

黄褐色硬質ローム層，下総台地では石器を出土する最古の自然層と言われている。

⑦ XI層（星谷津IX層）

褐色ローム層，粘性が強く縦方向の亀裂がみられる場所があり，武蔵野ローム層に該当すると言われている。しかしながら，立川ロームと武蔵野ロームの境界については武蔵野台地においてもまだ確定しておらず流動的な要素を含んでいる。今後充分は検討が必要であろう。（註2）

4. 結語

関東ローム層は降下火山灰層の風化堆積物であり、その堆積の様式の様式は様式ではないが、黒

色帯，通常のローム層を問わず，石器が連続的に出土しており，当時の自然環境に大きな変化を与えた大規模な降灰はなかったものと推定される。ただし，AT，黒色帯の上面での時間的な断絶が石器群の流れにどのように対応するか興味ある問題である。

また，基本層序の確立については，研究の進む武蔵野台地においても細分の可能性がある。今後は，石器群の型式学的な研究，技術基盤の研究とともに検討していかなければならない問題であろう。

ローム層について雑感を述べてきたが，いささか雑駁になり，事実誤認や見解の相違も考えられる。ご教示願えれば幸いです。（了）

（3班・萱田事務所）

註

- 1) 町田洋氏によれば，立川ローム層は数十～数百枚のテフラの累層（平均約2cm）によって形成されているが層理面の把握は困難であるという。この点についてはテフラが厚く堆積し，テフラ単層が明確な供給火山に近い地域での調査を実施し，不備を補う努力をしている。（町田洋他 昭46）
- 2) この点については充分なデータが揃っていない。

武蔵野台地ではXIII層（スコリアを含み，硬質な硬質ローム）とXIV層（チョコレート色の軟質ローム）との間に境界があると言われているが，下総台地でこれらの層位の有無は不明である。

参考文献

- 『第四紀研究3-1-2，テフロクロロジー特集号』昭38
『第四紀研究3-4，古土壌特集号』昭39
関東ローム研究グループ『関東ローム—その起源と性状』昭40
貝塚爽平「日本第四紀の自然5 関東ローム」『日本の考古学I』昭40
杉原重夫「下総台地西部における地形の発達」『地理学評論43』昭45
堤貞夫「No.55遺跡の関東ローム」『三里塚』昭46
林謙作「層序区分」『物質文化21』昭48

鈴木道之助「木苧峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』昭49
羽鳥謙三「粘土鉱物分析」『中山谷遺跡』昭50
小林達雄「層位論」『日本の旧石器文化Ⅰ』雄山閣昭50
井尻正二・新堀友行編著『新版地学入門』昭51
松井健「考古学と土壌学」『考古学研究23-2』昭51
町田洋・新井房夫「広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰発見とその意義」『科学46-6』岩波書店昭51
鈴木道之助「下総台地における先土器文化の概要と変遷」『千葉県文化財センター研究紀要Ⅰ』昭51
町田洋『火山灰は語る』蒼樹書房昭52
新井房夫・町田洋・杉原重夫「南関東における後期更新世の示標テフラ層—特性記載とそれに関連する諸問題」『第四紀研究16-1』昭52
町田洋『テフロクロノロジー—日本の第四紀研究』昭52

杉原重夫・細野衛・大原正義「星谷津遺跡の自然地理」『佐倉市星谷津遺跡』昭53
加藤好武「一次鉱物分析」『鈴木遺跡Ⅰ』昭53
新井房夫「火山灰同定の方法と日本の広域火山灰」『どるめん19』昭53
鈴木道之助「下総台地におけるナイフ形石器終末期の諸問題」『神奈川考古7号』昭54
高野博之他『布佐、余間戸遺跡』昭56
『千葉県文化財センター研究紀要6』昭56
田村隆「復山谷遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』昭57
新堀友行・柴崎達雄編『第四紀』共立出版昭57
ジョン・G.エヴァンス著 加藤晋平訳『環境考古学入門』雄山閣昭57
佐久間豊他『千葉県袖ヶ浦町清水川台遺跡発掘調査報告書』君津都市文化財センター昭58
金丸誠『佐倉市立山遺跡』昭58
町田洋・鈴木正男・宮崎明子「南関東の立川・武蔵野ロームにおける先土器時代遺物包含層の編年」『第四紀研究10-4』昭46
杉原重夫「地形の発達」『市川市史第1巻』昭49

千葉県君津市荘台遺跡出土の弥生土器

小 高 春 雄

I. はじめに

昭和56年、君津市内にあって、熱心な遺物蒐集活動を続けられてきた高橋聖雄氏の居宅を訪れた際に、最近、家の畑から掘り出したという土器を見せていただいた。

それは一見して、弥生土器の内でも古いものであることから、出土した場所に散在する該期の土器片をも合わせ、ここに氏の許しを得て紹介する機会を得たものである。

類例の少ない弥生土器の一資料として、また、君津市内における弥生時代の様相を知るうえに、新しい資料を付け加えるものとなろう。

II. 遺跡の位置と環境

小糸川下流域には、両岸に低平な洪積台地が広

がっているが、標高118mの三舟山の北麓には、上野台の台地を始めとして、広い台地群が認められる。

このひとつが荘台であり、今回報告する遺物が見つかったのは、この台地の北西端に当る場所である。この台地は、東西800m、南北300mの細長い楕円形を呈し、上面は平坦であり、北側の一部分を除いては周囲の傾斜は急である。また、西側から深い谷が入りこんでおり、周囲の台地群との境界をなしているが、その東端は、細い尾根道で南東の丘陵と結ばれている。

台地上面は一般に腐植の発達がよく、厚い黒土層の堆積が見られ、かつては、大部分が畑として利用されていたが、現在は、果樹園や一部の畑を除いて荒蕪地と化しつつある。